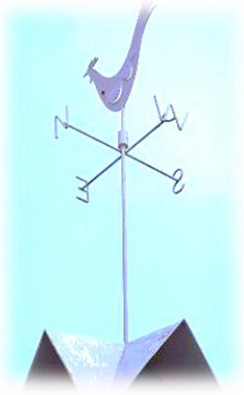
システムと意識の共有

楽しく、ワイワイやるチームであって欲しい

2018.04.04
No.02
校長　渡邉　幸二



新年度のスタート時というのは、どこの学校もどこか張り詰めた空気が流れ、とっても忙しいのですが、一方で春の光のような明るさや希望に満ちあふれているんじゃないかと思います。ここ浜田小学校の職員室にもそんな温かな空気が流れ、そして先生方の何かを始めようとする、あるいはどこかを改善していこうとする波動がみなぎっていることをうれしく思います。

さあ、始めよう！

学校だけでなく企業でもそうだと思うのですが、何かを始めようとするときに必要なのは、それを機能させるための**「システム」**（仕組み・手立てなど）と、なぜそれが必要か、実現したらどうなるかなどの思いをみんなで持つ、つまり実現のためのエネルギーを一方向に向ける**「意識の共有」**が重要だと思います。

おそらく、この「システム」と「意識の共有」は車の両輪のようなもので、子どもたちの学習に例えるなら**「習得」と「活用」**のようなものす。どちらが欠けてもうまく機能しないでしょう。優れたシステムを創っていくには、それなりの知識（教育的な知見・アイデアなど）が必要ですし、資金（物・形・人・金など）も必要となるでしょう。ただ、そのシステムを動かしていくのは機械ではなく、教育現場では「人」（教職員、子ども、保護者・地域の方など）ですので、みんなが一様に動かすわけではありません。できるだけ高いレベルでそのトリセツを理解し、相当の思いをもってそのシステムを動かそうとすることが、その取り組みの成否を分けるのです。ですから、いくらどこかの偉い校長が声高に、あるいは管理的に威圧的に、理想的と思っているシステムを入れようとしても、実際に現場の最先端でそれを動かしている教職員がその気がなければ全く成果は上がらないでしょう。まさに**「仏作って魂入れず」**となるのです。

松下幸之助の理論

しかし、学校現場でもどこかの企業でも、おそらく教室の子どもたちでも、すべての人の意識を共有することはできません。“みんながよく理解したら始めよう”なんて思っていたらいつまでたってもそのシステムを稼働させることはできないでしょう。それは、人がやることですら１００％でなくても仕方のないこと、そういうものだと割り切ってやること、ある意味気楽にやることも重要です。でも、いい加減でいいというのではありません。高いレベルで説明できるように、みんなに納得してもらえるような努力を惜しまずに共有化を図ることは大前提です。

では、どれくらいを目安に考えてシステムを動かしていればいいか‥‥

そんなときに、私がいつも拠り所にしているのは**「２−６−２の法則」**です。かの松下幸之助氏が使っていた法則のようですが、「パレートの法則」とも言われているようです。

昔、野球のジャイアンツが大型補強をして、各チームの４番バッタークラスの選手ばかり集めてチームづくりをしたことがありましたが、見事失敗していました。アリの世界でも、よく働く働きアリばかり集めても、結局は右の図のような構成になるのだそうですね。学校の現場だろうと、教室だろうと案外そういうものだと思うのです。

どの姿をめざしていくのか

ここで大切なのは、「２-６-２」のどこに照準を当ててシステムをつくるかということです。上の２割でしょうか。真ん中の６割、細かく言えば中の上？それとも中の下？もしかして下の２割でしょうか。ある資料を見ますと、**ビジョンは上の２割向けに**つくり上げていくべきだということでした。おそらく、先生方ご提案される起案も、私が先日示しました学校経営方針も、当然ですがそうなっていると思います。

これから提案される**システム**を、まず私たちは最大限理解(**意識の共有**)するよう努力しましょう。そして、そのシステムが動き始めたら、「２-６-２の法則」に則ってある意味楽しみながら実践を進めましょう。**起案者自ら**が楽しく進めることで、全体がそちらの方向に必ず寄っていきます。そして節目節目に、その理想とするゴールイメージに近づいているかチェックし、改善していきましょう（**ＰＤＣＡサイクル、改善・解決志向**）。もちろんその時に「やってらんねー」と言っている働きアリさんの声に耳を傾けることも大切です。そこに改善のヒントが隠されていることがあるからです。ただ、基本的には**理想に向けて楽しく、ワイワイやるチームであって欲しい**と願っています。

教室で行われている授業なら、どこに照準を当てて授業づくりをしているのでしょう。あまりにも中の下あたりを意識し過ぎていませんか？ちょっと考えなければいけないことだと思います。